

樺太州（国分青匡）

宗谷風煙漭欲愁 不圖題詠在巖頭
慨慷忍讀歌辭壯 漫漶猶看筆勢遒
草澤有人存遠慮 江湖何客抱奇憂
朔天日夕重重霧 爲我深遮樺太州

宗谷の 風煙 漭として 愁えんと 欲す

図ら ざりき 題詠の 巖頭に 在りとは

慨慷 読むに 忍びんや 歌辞の 壮なるを

漫漶 猶お 看る 筆勢の 適なるを

草沢 人 有り 遠慮を 存し

江湖 何れの 客か 奇憂を 抱くや

朔天 日夕 重々の 霧

我が 為に 深く 遮れ 樺太州

解説 宗谷海峡の歌碑を見て感慨を述べた詩。

語釈 ※樺太州Ⅱオホーツク海西部にある島。古くは北蝦夷と称した。※宗谷Ⅱ北海道北端の宗谷岬。※漭Ⅱ水のひろびうとしたさま。※題詠Ⅱ歌碑に記述してある歌。※慨慷Ⅱ憤りなげくこと。※歌辞Ⅱ歌碑に記述してある歌をいう。

※漫漶Ⅱはつきりしないさま。ここでは歌碑の字がすりへって詠めないさまをいう。※草奔Ⅱ民間。※遠慮Ⅱ遠い先まで見通した深い考え。※江湖Ⅱ川や湖。ここでは民間・世間の意。※奇憂Ⅱ世の常ならぬ憂い。※朔天Ⅱ北方の天。

※重重霧Ⅱ幾重にも重なりあつた霧。※為我Ⅱ自分のために。※深遮Ⅱ深く遮つて欲しい気持ち。

通釈 ここ宗谷岬に立つて眼前に展開する宗谷海峡の樺太を隔てて広々とした海上にたちこめる風と靄で、見晴らしが悪く、心が哀愁に駆られそうである。この断崖に図らずも「見るたびに憂ひそまるわが為に曇りて隠せ樺太の島」という一首の短歌を刻んだ岩を見つけた。この歌の作者は、樺太千島交換条約に反対の立場をとっている同憂の士であり、当時の我が方の貧弱な国力では、北方の脅威を避けるために、列強の勧めのとおり樺太をねじれた外交の恨事に対して、今なお憤りを禁じ得ぬものがあり、この歌碑の悲壮な調べは忍びぬものがある。彫られて数十年たったと思うが、風雨にさらされて文字もすり減ってはいる物の、筆力の強さを留めている。それにしても民間人にこの様な人物がいて、国家の前途に対する考えを明らかにしてくれていることはありがたい。世間では何人が、この事態を憂い嘆いてくれるのであろうか。北方の空に朝夕重なりあつた霧が立ちこめているが、私の為に樺太の島影が見えないように遮って欲しい。この短歌のとおり断腸の思いが勝るからだ。